

日本における乳幼児期の子どもを育てる父親の育児幸福感

愛知教育大学大学院 木田 千晶

2018年7月に開催された Pacific Early Childhood Education Research Association (PECERA)に参加した。発表テーマは、「日本における乳幼児期の子どもを育てる父親の育児幸福感」である。

近年、女性の就労の増加、男性の育児休暇取得率の増加など、子育てを取り巻く環境が変化し、「家事・育児をするのは母親の役割」という従来の考え方が徐々に減少している。しかしながら、欧米と比較して、日本の父親は育児参加がいまだに少ない。そこで本研究では、育児を行う父親が、どのような場面で、どの程度の幸福感ややりがい、あるいはストレスを感じているのかという、父親の育児の特色や課題を明らかにするための手立てとして、父親を対象とした育児幸福感尺度を開発した。

尺度項目の収集で抽出された10要素60項目と、信頼性・妥当性の検討で使用する3つの尺度を含むアンケートを実施した。因子分析の結果、I「妻と協働し承認される夫としての自分」、II「子どもの成長を支える親としての自分」、III「子どもと時間を共有する家族としての自分」、IV「父親として社会とつながる自分」、V「父親として人生を生きる自分」の5因子31項目が成立した。I「妻と協働し承認される夫としての自分」に関して、父親は、子どもとの関わりよりも、育児を通して築く妻との信頼関係・協力関係の良好さが育児幸福感に大きな影響をもたらしているという特色が明らかとなった。

日本独自であると考えていた父親の育児参加への課題に対して、他国からはどのように捉えられるか、どのような違いがあるのかについて意見交流できることを期待して学会に参加した。発表を通して、父親の育児参加への問題意識は、参加する女性研究者たちからも共感を得られるものであり、日本だけが抱える課題ではないと感じた。父親に焦点をあてたことについて関心をもっていただけたことから、今後研究を進めるにあたって、母親だけではなく、父親や家族、社会問題など、多様な側面から問題を捉える必要性を実感することができた。活発な意見交流の場を経験できたが、詳しく伝える英語力がなかったことを痛感する機会ともなった。次回の参加に向けて、英語力の向上も個人的な今後の課題として挙げられる。